

昭和二十六年十二月二十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第二七一号）

慈光

第二十三卷 第十二号

次

懺悔録（四）——王舎城の悲劇……………近角常観……………(1)
あ あ 中田悦二君……………聴聞子……………(6)

——信念の修養人——

目

和 国 の 教 主……………白井成允……………(12)
念 仏 詩 抄……………木村無相……………(17)
南 無 阿 弥 陀 仏……………花田正夫……………(20)

懺悔録

近角常観

第五章 王舎城の悲劇

そもそも王舎城（おうしゃじょう）の悲劇は、從來浄土教の起源としては、何人も知らぬことなき事実なれども、いまだ知らざる人のために、一応お話をしてみようと思ひます。

仏在世の当時の印度諸国の中で、マダカ国というのは最も大國であつて、その国の王、ビンバシヤラは非常なる有徳の君主であつた。現に釈尊がシッタ太子として、十九歳の時、カピラ城をのがれ、道を求めるために山に入らんとして、マカダ国を過ぎたまいし時、ビンバシヤラ王は平素から非常に太子を慕ひし故、これを止めて、もしカラピ城が小にして不満足であるならば、わが国の一半をゆずりましょう。もしそれでも不足ならば全体でもゆずるから、これを治めたまへとまで云われた人である。

この時太子は、我はこの如き俗的の王国を望むのではない、安心の道を求めるのであると云われたのでビンバシヤラを殺して位を奪わしめ、彼のたすけによりて自らも亦隠謀を實行しようとして来た。ここにおいて王舎城中、大なる悲劇が起つて来た。

阿闍世はダイバのそそのかしにしがたつて、父の王ビンバシヤラを収執して、七重の室内に幽閉した。ビンバシヤラ王の夫人イダイケは、すこぶる愛情の深い人で、如何にもしてビンバシヤラ王を慰めたてまつらんとし、色々工夫の末に、まず我身を清浄に洗い、よく製した麦粉を蜜でねつて、それを自分の肌塗りに塗り、淨衣をもつて其上を覆ひかくし、又瓔珞（えうらく）の一々に、葡萄（ぶどう）の漿（こんず）を盛つて、蠟（ろう）をもつてこれを封じ、常の如くこれをまとい飾つて、ビンバシヤラ王の牢獄の中に行き、ひそかに食物を進めた。王は夫人のすすめる食物を喫しおわつて、清らかな水を求めて口をそそぎ、合掌恭敬してはるかに仏陀を礼して、願つて云うには、「大目蓮はわが親友であります、どうぞ世尊お慈悲を起して彼をつかわして、私に八斎戒（はっさいがい）をさすけしめたまえ」と。すると目蓮もる八つの戒律（がいりつ）をさすけしめたまえ」と。すると目蓮は、あたかも鷹の飛ぶが如く、はやく王の所に到つて戒をさすけた。

毎日この通りに目蓮が戒をさすけるうえに、なお仏陀は、能弁のほまれあるフルナ尊者を遣わして、王のために

ヤラ王は、然れば太子もし道を得たまひたならば、まず来て私にこれを授けたまへと云われたとのことである。かく有徳なる君主なるにかかわらず、宿世の因縁によりて、実に不孝きわまる太子を持たれた。即ち阿闍世王がそれである。

仏が成道の後、故郷へ帰られた時、釈迦族はこぞつて出家して仏の教団に入つたが、その一人なる仏の従兄弟にあたるダイバと云える人は、余程峻刻嚴厲（しゅんこくげんれい）なる性質の人であつたと見えて、仏の教団中において、仏陀の弟子に対する態度が、寛容であることを甚だもどかしく思うて、手厳しく弟子を訓練したいと申し出たが仏がこれを許したまわぬので、大いに不平であつたということである。ここに彼は、自己を仏陀に代りて、思う存分自分の思う通りにやつて見たいと考へ、ついでに一大婦依者を見出さねばならぬといふので、この阿闍世太子をそそ

説法せしめられた。このように一方には肉體上の食物を得、また精神上の糧（かて）をも得て、ビンバシヤラ王は、顔色和悦（わえつ）にして、三七日を経るも何等の変りもなかつた。

そこで、阿闍世王は不審に思いつつ、自ら往きて取り糾（ただ）さんとて、牢の門番に、父の王は未だ生きて居られるかどうかとたくみに問ひかけた。門番は事情をありのままに話した。阿闍世は聞くなり火の如く怒つて

「我母はこれ賊なり、賊たる父の王と伴なればなり。又沙門は悪人なり、種々の幻術をもつてこの悪王の命を延ばす」

と罵り叫びつ、左手を伸べて母の髪をつかみ、右手に利剣を執つて母の胸に擬し、あわや一息に衝き刺さんとした。母は驚き合掌して、身を曲げ頭を垂れて、我子の手にすがり、全身熱き汗を流して、身心悶絶した。

この時、大臣の月光と耆婆（ぎば）があわててこれをさへぎつて云うには、昔より諸の悪王があつて、国位を奪わんとために、その父を殺害せるものは多い、けれどもまだ無道に母を害せるものあるを聞かず、王にしてもしこの如きを為さば、これはセツテ種の恥であり汚れである。臣等これを聞くに忍びず、これセンダラの行いなりと、大いに苦諫（くかん）した。阿闍世もこのいさめにあつて剣を捨

て、母を害すること丈は思いとどまったが、忽ち侍従に云いつけて、母を深宮に幽閉して、一步も出さなかつた。

イダイケ夫人は獄中に幽閉せられて心神愁憂し顔色憔悴(しょうすい)して、見るかげもなき有様になった。はるかにギシヤクツセンに向つて、仏を拝して祈念して云うよう「如来世尊、むかしは常に阿難をつかわして、我を慰問したまえりしかるに我今不幸にしてこの如く悲境におちりました。世尊は勿体なくしてお目にかかることは恐れ入り、まする、願わくば目連と阿難をつかわして、我を慰めたまえ」

と。かく云い終つて悲泣して涙雨の如く下り、容易に頭を挙げる事が出来なんだ。仏ははるかにこれを聞き給うて、みずから目連と阿難を従えてイダイケの獄中に臨みたまうた。

時にイダイケは頭をあげて仏を見たてまつるや否や、自ら身の飾りを引きちぎつて、身を挙げて地にひれふし、号泣して仏に向つて曰く

「世尊、我身は宿世に何の罪があつて、此の如き悪しき子を生みしか。又世尊は如何なる因縁によりてダイバ如き悪人とご親類にてましますか。唯願わくば世尊、わがため憂悩なきところを説き給え、私はそこへ生れたく思ひます。私はこの濁悪の世界に懲(こ)り果てました。」

と。実にこの一言はイダイケの心中に徹到して、生ける仏陀の慈悲を感受せられた根本である。観無量寿経一部の要点はこの一語の中に結晶せられてある。

王舎城中の暗澹たる獄中、煩悶苦痛の極度に達したるイダイケ、温顔微笑「阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と教を垂れたまひし釈尊、けだし宗教的舞台として、実に壮大を極めてある、これ観無量寿経の説法のはじめにして、又その要点である。

韋提希は仏陀の御慰安を受けて心に歡喜を生じ、廓然として心中大いに開け、偉大なる信心を生じ、五百の侍女また求道の心をおこした。実にこれ弥陀の本願力を実験せられたはじめの事実である。しかしてこの事実は千古人生において常に起りつゝある事実であつて、いやしくも人生のあらん限り、この仏陀の慈悲ならでは、安慰を得ることは出来ぬ。

前にあげた某君が、信心を獄中に得られたる場合と、イダイケ夫人が幽閉の中において光明に撰取せられたる場合とは、実に符節(ふせつ)をあわすが如くである。歳月を相へたつること二十余年、地域の相はなるること数千里、しかして味わりと同一仏陀の慈悲である。

私は、不幸にも獄中にある人は、あだかも信心を得るに最も適切な境遇であつて、我々信心の眼より見れば、仏

この世の中は苦でみたされ、悪人ばかりであります。願わくば未来においては、再びかかる憂き目を見たくありません。

と云いつつ、五体を地に投じて、求哀懺悔(くあいざんげ)して、切りつめて願つて曰く、

「願わくば仏日、われに清浄業処(しょうじょうごうしよ)を觀せんことを教えたまえ」

と。仏はここにおいて眉間(みけん)の光を放つて十方諸仏の国土を見せしめられると、イダイケはこれを見おわつて

「諸の仏土はいずれも清浄にして皆光明がありますが、私は今、極楽世界の阿弥陀仏のみもとに生れんとおもいます。唯願わくば世尊、われを導き給え」と申し上げた。仏はこれを聞きしめて微笑したまひし

に、慈悲の光、仏の口元よりあふれて、はるかにピンパシヤラ王の頂(いただき)を照らした。大王の心眼はさわりなく、世尊を見たてまつりて、漸々に仏道を進め給うた。

仏をこの如く満足なる御貌(かんばせ)をもってイダイケに告げてのたまわく、

「汝今知るや否や、阿弥陀仏ここを去ること遠からず。汝まさに念をかけてあきらかに彼国の浄業を成じたまへるひとを觀すべし」

陀の慈悲を感ずべく、此の如き境遇に追いつめられたものであると思つて居る。しかるにもしいたらずにその機会を失して、かえつて罪惡の深みにおちいるが如きは、はなはだ遺憾な次第であると考える。

されど一般世上の人といえども、自分は獄中に居らぬゆえ、以上のことは自分等の境遇でないと考えているならばそれは大なるあやまりである。首(こうべ)をめぐらして見れば、人生は実に一大牢獄である。いたるところに煩悶苦惱の叫びが聞こえて居る。私の『信仰之余瀝』にある「信界における監獄」といえる一章を熟読して下さつたらば、この意味は明瞭である。また人生問題に苦しみつつある人は、前にあげたイダイケおよびこの君の場合をよく了解することが出来るに相違ない。しかしてことにイダイケといえる女性の人が、はじめて仏陀の慈悲に接したというところが、最も注意すべきことである。女性の人はとかく煩悶が多いのであるが、その人に対して最も適切な救済は、仏陀の光明である。これ親鸞聖人がこの事実をもって

「淨邦縁熟して調達(ダイバ) 闍世をして逆害を興せしめ、淨業機あらわれて、釈迦韋提(イダイ)をして安養をえらばしめたまえり。これすなわち、權化(こんげ)の仁、ひとしく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、まさしく逆誘闍提(せんだい)をめぐまんとおぼしてなり」

と、喝破(かっぱ)せられたる点である。

この如く、イダイケ夫人が信心を得られた事実が、観無量寿經の要点である。しかししてこの観無量寿經の裏とも申すべきものが、即ち涅槃經における、阿闍世王の無根の信を生じたる事実である。この事實はすこぶる長き説話であるが、悪人の救済といえる親鸞聖人の信仰を説くには、はぶくべからざる点である。しかしして韋提希の事実が、あだかも此君の場合と同じきが如く、阿闍世王の煩悶と罪惡観は、実に私自身がおちいりた境遇と全く同等と考えている。私はこの涅槃經をひもとくごとに、決して他人の事を書いてあるものとは思えぬ。

しかのみならず、涅槃經の文が、当時印度に行われつゝあつた六派哲学の議論では、何等の安心をも与えなうだが仏陀の慈愛によつてのみ、はじめて安心が出来たというところを、詳細に書いてあるので、今日の信心を求める人が、はじめは哲学や理論で安心を得ようと試みて、ついにこれに疲れはてて、最後に仏陀の慈悲に帰して、大安心を得るにいたる事実とよく符合している。極言すれば、阿闍世の得信は、実に現時信仰問題の標本ともいふべきものである。それゆえわずらわしきをいとわず、次の章において涅槃經の文句通りを大略のべようと思ふ。

孫と祖父の問答

橋本 顯誠

——お祖父ちゃんいくつ？

——お祖父ちゃんは七十五——

——僕の十五倍だね、なぜそんな長いこと生きているの

——なぜってまだ死なないからよ——

——そんならいつまで生きているの——

——そりゃわからんよね——

——お祖父ちゃん死んだら、どこへいくの——

「先生、あわれなものです。五つの孫にきかれて、七十五のわたしがつまつてしまいました」

この老人の眼には、涙がにじんでいた。

「それで、あんたはどういいましたか」

「子供のくせに、そんなことかんでもよい、とやうてやりました」

もう老人は泣いている。一かどの立派な一生を送った、幸福な七十五才の老人の腹一ぱいの結論がこれでした。

○
詩人ゲーテは「死の彼方に光明を見出し得ないなら現実も暗黒だ」と言い、最後に「モット光を！」とが辞世であつた。

ああ中田悦二君

——信念の修養人——

まえがき

ピカソに年をきいたら、これからさき生きたい年、を答えたという。

信泉会員(住友信託銀行信泉会員)ともなれば、ピカソ式年令は縮まるばかりである。そこでこの期に及んで、人生の価値問題は一体何なのか一口のこと、住い、子供のこともさることながら First things First の観点からすれば、なんといつても、この世の決着一死への覚悟といったものが、真先に取りあげられるべき問題ではなかつたか。この意味で私は幸運にも、典型的修道者の真面目を、ありし日の中田悦二氏の上に見たのである。

さて中田氏の墓碑銘は、すでに『信泉たより』上に、立派な活字となつて、読者に深い感銘を与えたが、私がここに特筆したのは、何が氏をして、あの天馬空を駆けるの概がある、目覚ましい活躍ぶりを演じさせたか。また、その起

聴聞子

(79)

爆力はいかなる過程をへて取得されるに至つたか、を銘記したいことである。

さる十一月、私は中田氏ご令息浩治氏から、長文の親書に接した。氏はまず、故人が、家庭において示された、慈愛と眞実について、つゞぎに記述賛嘆せられ、続いて、ご尊父が、晩年、宗教関係の書物を愛読し、機会あることにご近親に、数々、多彩な修養談をされたこと。ご親戚の法要の節などには、ひとり残つて、住職と熱心に、往生問答など交わされたこと。また求道のためには、常に懸命の努力をされたご事績などを回顧せられ、きん(欽)慕のあまり、なお進んで深く、先考の求道態度の一面を承知された。私へ、浩司氏のこの至孝至純のご心境にいたく感激を覚えると同時に、宿縁の不可思議に驚嘆せざるを得なかつたのである。さっそく、ご来趣に対し敬意を表するとともに

予備資料の意をかね、私の手記『あち中田悦二君―弔辞にかえて』を速達した。……(昭和四五年除夜)

本文

「人間忽々(そうそう)、衆務を営み、年命(ねんみょう)の日夜に去るを覚えず」(往生礼讃)

十月十日、突如、君のふ報に接した。

君の病難が私を知ったのは、七月の初め。八月には君みずからの健筆(墨書)をもって、病状一ぱんと、徹底した人生観を、三回にもわたって寄せてくれた。しかも、九月七日づけには「御陰様で経過順調にて、昨六日無事退院出来ました。なお暫く、自宅にて療養の上、歩行の自由を確保した上、出社の予定でございます。」とハッキリ記してあったので、ツイ安心して安易にきめこんでいたのであった。そこへの悲報である!

一時はユメかと疑ったが、真実は夢でも虚報でもなかったのである。

君はもう帰ってこない―あの純情かつ達な快弁や朗笑はおろか、再会は望みなしとなると、日をへるにつれて敬慕追憶の念、おさえがたいものがある。

△君と私のつながりは、大正十五年、備後町時代にはじまる。ややナンシーふうとさえ見えた当時のヤング・ナカ

く「自力」から「他力」への大転換である。

◎七月末日づけの来簡の一節

「私は小学生のころ恩師からいわれた一語を時々想い起こすのですが、それは『実行する』ということでした―『修証一等であり、行持は道環である』という言葉を出します」

「かれこれ小六ツカ敷く頭の中で考え廻してみたところで、それがどうなることでもなし…一隅を照らすことを実行すること―自分の力で出来ることを、たとえ小さなことでもやってみて、その中で、若干でも喜びを感じる事が出来れば、それでよいではないか、と思うようになりました。自分で病気をして見て、何か今までの考え方が至らなかつたように思え、まことにもって恥しい次第です」

◎八月十日づけ病院からの書状の一節

「ユバルト60の照射を永くつづけ(約三カ月)々上咽頭腫瘍を退治している間に、体全体の力が衰え、体重も六キロあまり減少し一向に回復せず、そのうちに、神経痛の症状が起こり、特に足のヒザ頭が痛く、駅の階段が思うように昇降できぬようになりましたので、思

ダには、後の俠骨香ばしいミスター・ナカタの片りんさえも、ボンヘッドの目には映らなかったが、やがて迎えたプロジエクト東京時代には、大先輩斎藤洲司氏を主監に載き、堂々たる活躍ぶりを發揮し、大いに業権の拡大に寄与されたものである。

戦後、一日、私は静岡に君の支店長ぶりを拝見に及んだことがある。―職責、手腕の非凡に加え、君の精神、氣象というべきものには、勇猛果敢・進取堅実・至誠報恩といった美德が、みごとに定着し、部下諸君の間には、トップに対し、カリスマ的信頼のムードさえみながぎって、うるわしいもののかぎりであった。

△定年退職後の君の「こころ」の成長は、宗教的信念の領域において、著しいものがあつたと思う。そして、信念は、修養しだいで、その深さにおいて底知れぬものがある―と達観されたのは、君の開拓し、到達しえた価値観でありまた、それゆえにこそ、菩薩行(ぼさつぎょう)への精進は、君一生の努力目標であつたと思われる。

ことに、昭和四十二年ごろからこのかた、東京における信泉会員の「たまり」では、君を中心に、活発な人生論議が、しきりに取りかわされたものだったが、その間(かん)君は、日蓮・道元の真髓から出て、やがて親鸞の「大悲廻向の念仏」に向いつつあつたやに推測される―まさし

い切つて入院し、体力の回復に専念することに致しました。八月四日入院し、連日各種の検査を受けておりますブドウ糖液の点滴五〇〇ccを連日つづけ、その他輸血を実施し、速かに体力をつけるよう努めております。お陰様で、若干力が出てきたように思います」

「キット元氣を取り戻して退院しますから、いずれその節拝眉の機を得たく楽しみにしています。……ホントにいろいろご心配をおかけし、申し訳ございません。―これも悪業の因縁というものでしょう」

「私事のみ書き連ねて恐縮ですが、郷里の老母(明治十八年生まれ)を見るまでは死ねない身体ですから、それまではクタバリません」

「禅僧の死に対する吉川英治さんのお考え、含蓄があると思います。もちろん、出家証道に激しい修業を経てきた禅僧には、日蓮をして禅天魔といわしめただけの強壯な気魄感ぜられますが……しかしまた『今までは他人のことかと思つたに、俺が死ぬとは、これはたまらぬ』といった禅僧もあるとか、ズバリ本物でしょう。少なくとも私には共感が持てます」

「吉川文学の三つの柱①求道②無常観(もののあわれ)③骨肉愛。その通りだと思います…私自身を考えて

みても思いあたるように思います」

「自力と他力の問題」『人事をつくして天命をまつといふ言葉があるが：われわれ凡情の徒が、かかる境地に達するといふことは、むろん容易ではないだろう。しかし人間は必ず死ぬ。——この一見冷酷な運命があるからこそ、同時にどうかして本当の死所を得たいという祈りも与えられるわけであって、死がなければ、われわれは、天国を欲したり、涅槃（ねはん）を夢みたり、神仏に祈ろうとする心を起さないのである。死という定められた運命が、同時に人間をして人間以上のものにあこがれを懐かせる。死が永遠の生命を教えるといつてもいい』（亀井勝一郎氏を引用）

「『この生死はすなわち仏の御いのちなり。これをいといすてんとすれば、すなわち仏の御いのちをうしなわんとするなり。これにとどまりて、生死に著すれば、これも仏の御いのちをうしなうなり。仏のありさまをとどむるなり。いとうことなく、したうことなき、このときはじめて、仏のところにいる』

『仏となるにいとやすきみちあり。もろもろの悪をつくらず、死に著するところなく、一切衆生のためにあわれみぶかくして、かみをうやまい、しもをあわれみ、よろずをいとうところなく、ねがうところなくて、心におも

うことなく、うれうることなき、これを仏となづく。またほかにたずぬることなかれ』（正法眼蔵ノ生死ノを引用）

「ともあれ、この四日間連続して一、四〇〇cc（二〇〇cc七本）の輸血を受けました。一分間に約四、五十滴位のゆっくりした速度で降下してくる、どす黒い血を見ていると『ああこの血は俺のものではない』少なくとも七人の未知の、しかも私よりもあとから生れて来た人たちの尊い血の一滴をホントに手を合わせて戴かなくては相済まぬし、誓ってそのお志を無にしてはならぬと、堅く決心している次第です」

「追申、近日中退院出来そうです。ありがとうございます」

◎八月二十日づけ病院からの手紙の二節

「拝復ご芳書ならびに銀行クラブ誌とゼロックス速達便でお届け下さって有難く拝受しました：清空一碧の境地にあずかる：そういう心境がいつまでも持続出来て、そこにドッカーリ座っておられるならもう何もいうことなしです：仰せの如く、迷中また迷、行きつ戻りつの生活の繰り返しです。しかし、時には古人の語録に接したり、先輩や達人の言行に接するとき、ハッとすることもあります。暑さの中を色々とお心を配られて、励ましのお言

葉を賜りましたことを幾重にも御礼申し上げます」

◎最後に九月七日づけ退院だより（前出）

筆者小感

▽来書中、母堂に対する至孝至純の情熱や、見えない輸血の恩人たちへの感謝と誓いのコトバは、君の徹した四恩観（父母・国王・衆生・三宝）仏・法・僧）の反照であると受けとられるのであります。

▽病中、君は吉川哲学の『人生は生きるに値する』とか「朝（あした）のこない夜（よる）はない」という確信——必らず、どんなに追いつめられても、なおかつ朝を信じて努力を怠らなかつたという事実や、また、吉川氏が肺ガンでガンセンターで臨終間近かに、コトバは出ないから、ただウン、ウン、ウンと云って紙と鉛筆を持って来させ、板をおいて、たつた四つの片仮名「ヨクナル」と書いて、自分に云い聞かせて、自分をふるい立たせたという、すさまじい闘魂ぶりを伝承されて、君の信眼に一段の光彩を添えられたことでありましょう。

▽また、来書中に引用された「今まではヒトのことかと思つたにオレが死ぬとは、これはたまらぬ」という禅僧のコトバというは、吉川さんの『人間の生（い）き死（し）に観』に出てくる、峨山（がさん）オシヨウ（天龍寺）の『やいみんな見ておけ。死ぬというのは、つらいもの

だ。苦しいものだ。ああ死にとうないわい。ああ死にとらないわい』（コレニーバン心引カレル、ト吉川サンハ言ッタソウデス）という話にも通じることで、法縁あらたなわが友には、奇しくもここにヒントをえて「ああそうだ。死にたくないのは、オレのことだ。この心の悩みに同情して」むむむ、もつともだ。それがいかにも、かわいそうだから、ワシは、どこまでも、いつまでも、お前と一緒にいていくから心配するなよ」と呼んで下さる、形なき実在の（仏の）声が、ハッキリと心の耳に聞えてきた！と気がつくと同時に、初めて、「弥陀の五劫思惟（ごこうしゆい）ナガイアイダ考エヌイタ）の願（がん）スクイノチカイ）をよくよく案ずればひとえに親鸞一人（いちにん）がためなりけり。さればそくばく（タクサン）の業（ごう）ママナラヌコト）をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願（ほん）がん）スクイノチカイ）のかたじけなきよ」という、しんらん自督のコトバに目覚められたのではないかと拝察いたしております。

ハ今生、夢のうちの契（ちぎり）を知る辺（べ）として来世さとの前の縁を結ばんとす。われ遅れば人に導かれ、われ先き立てば人を導かん。生々に善友（ぜん

う)となりて、たがいに仏道を修せしめ(シユギョウシテ)世々に知識として、ともに迷執(めいしゆう、マヨッタシユウネン)を断たん

さて、わが善友、中田悦二君は、われらをおとに、先きに立たれたのだ―尊い多くの体験と教訓とを残して。立つて君はどこへ行った?それとも、永遠に君は消えうせたのか?

宗教的感覚の持主、科学者アインスタインは、「人生」を心に深くふんまえて、*Always going - but never gone*と教えてくれた。仏縁あらたなわが友には、ア氏のこの語をばく如来常住(にょらいじようじゆう)の声として、しかと胸に受けとめられたことである。

そうした君は、地上、六十路三歳(むそじみとせ)の秋をくぎりとして、莊嚴なる挽歌(ばんか)に送られ、快馬一鞭(べん)、自然法爾(じねんほうに)の光りに乗って信界「絶体」のとわの旅路についたのである―

『いかにいわんや、戒行慧解(かいぎようえげ、カイリットサトリノチエ)ともになしといえども、弥陀の願船(スクイノチカイ)に乗じて生死の苦海をわたり、報土(ジョウド)の岸につきぬるものならば(シゼンニツイ

和 国 の 教 主

和国の教主聖徳皇

廣大恩徳謝しがたし

一心に帰命したてまつり

奉讃不退ならしめよ

親鸞聖人は、求道の涙に於いて、聞信の喜びに於いて、讃仏の辿りに於いて、常に聖徳太子の広大なる恩徳を奉謝したもうた。和国の教主と仰ぎたもうた此の讃歌は極めて晩年の御作である。聖人にとりて太子は何故にかく和国の教主と現れたもうたのであろうか。其の内因外縁、思うに重々無尽であろう。但、た今之を想(おも)いまつるに、次の如き消息は蓋(けだ)し最も省みるべきものではあるまいか。

日本国は、其の初め天神の勅によりて開かれ、勅に随順する大行によりて建て維(つな)ぎ伸ばされ来たった。その勅はすべての神々人々を子として慈しみたもう御親心に出で、その大行は実に此の御親心に懐かれまいらせたる者

テシマウノデアツタラ)、煩惱(ニンゲンク)の黒雲はやくはれ、法性(シンニヨ・ネハン)の賞月すみやかにあらわれて、尽十方無碍(カゲリノナイ)の光明(ドコマデモミテクダサル・ゴシンジツ)に一味にして、一切の衆生を利益(キユウサイ)せんときにこそさとりにてはそうらえ』

ここに慎んで、生前、君の愛読含味された、歎異抄の一節を掲げて手向(たむ)けといたします。

昭和四十五年十月十二日。しるす。

(あとがき)

君の信界への挑戦ぶりは真にユニークなものであった。昭和四十二年ごろから、親鸞の探究を主軸として、私などにまで寄せられた書状・トルコールなど合わせて十八件来談回数五遍、随処会談にいたっては二十数度に及んでいる。その求道的姿勢から推して、君はまさに「勇猛精進にして志願倦むことなき」菩薩行者の再現であった。

私はあらためてここに、生前君の垂れたまった、いくた貴重な教訓に対して、心からなる感謝のマユトをささげる者である。

白 井 成 允

のおのずからなる子心の動きであった。神武天皇が、海内の平定したるを皇祖の靈に謝したまい、天神を祀(まつ)りて大孝を申べたまいたるところに、実に日本国はうち建てられ、日本国の道のあるべき相は永しえに定められたのである。蓋し此に、天皇の大御身に於いて、天神の慈みの御親心と、その御親心に懐かれまいらす子心との相(すがた)が一つに成りて照り輝きましたからである。

天皇の御親心と人民の子心との一つなるところ、天皇の赤子として国民一つに生くるところ、此の和そのものこそ、是れ真に日本国の道の相である。而もこの相は、自然に具わりつつ久しく自覚されず、建国以来凡そ千年経て、此の国の道のまさに危からんとし、国民は國家空前の悲歎事にも驚かざる程に心眼盲いてしまった。

かく日本国の道の滅びんとする危機に際して、独り斯の道の真実を觀、此を教として深く世間に自覚せしめて、吾等の国体の尊嚴を維(つな)ぎ頭(あらわ)したまい、則ち永しえに日本国の教主となりたましいしが、畏くも聖徳太

子にてあらせられる。

曰く、詔を承けて必ず謹め。君をば則ち天とす、臣をば則ち地とす。天覆（おお）い地載（の）す。四の時順（めぐ）り行き、萬の氣通うを得。地天を覆わんと欲（おも）うときは則ち壤を致さんのみ。

曰く、国司国造、百姓に歛（おさめと）ること勿れ。国に二の君非（な）し、民に両の主し。率土の兆民王を以て主と為す、任せる官司は皆是王の臣なり。何ぞ敢て公の写に百姓に賦（おさ）め歛（と）らん。

是れ蘇我氏の逆悪専横を前にして敢て宣べたまひし国体の大義の教である。太子は此の嚴肅なる教を通して、かの危機は転じて実に日本国体莊嚴の無上の時期となり得たのである。

○

然し教は人によりて己の真実を證し、能く世を動かす力となる。太子の教の奥に、太子の人が在します。吾が真宗の寺々に必ず斎（いつ）かれまします太子孝養の御像と、法隆寺殊に其の金堂に拜まれます薬師仏と、三骨一廟に鎮（しずま）り在す磯長の御墓と、その御墓の意味を永しえに伝える天寿国曼陀羅繡帖の銘文とは、太子の大孝を永しえに吾等に告げたまわる記念である。

然るに太子に於いては孝は即ち忠である。推古天皇の撰

罪あらばわれを咎めよ天つ神

民はわが身の産みし子なれば

と詠みたまひし勿体なき大御歌を通して偲び奉ることができよう。馬子の逆悪の念も、此の御慈涙の前には己れを咎めざる能わず、太子薨去の後にも猶敵しく入鹿の不臣を憤った程になったのである。

同時に、太子御自ら万民を代表して、上御一人に仕え奉るべき御身であらせられた。上御一人に対し奉るとき、太子は勿体なくも蘇我氏の逆悪をそのまま御自身の罪として感じたまわずにはおられなかつた。此には、法華經の御疏に於いて、諸法実相の哲理と六根清淨の実修とを愚心及び難しとことわりたまひ、憲法の条文に於いて、共に是れ凡夫のみとあかしたまひ、常に世間虚仮とのたまひしという御心の内に、しみじみと秘めたまひし御涙が窺われる。

然もこの御涙はやがて唯仏是真の信に於いて救われたまう。乃ち篤敬三宝（あつく三宝を敬え）の御教が告げられる所以である。

曰く、其れ三宝に帰（よ）りまつらば何を以てか枉（まが）れるを直（なお）らせん

太子は此の如く深き罪業と其の慈教との御体験を通して、終（つい）に帰依仏の無碍道を歩みたまうた。而して此にこそ太子は日本国の道の無碍なるを信じ得たまうた。しみ

政として万機をみそなわし、国家空前の危機に処して日出する国の興隆の礎を定めたまひし御鴻業は、明治天皇の御聖蹟と相ならびて、日月の天に懸かるが如く、永しえに日本国史を照らしまします。是れ太子の純忠千古を貫く明證である。

然るに真に日本国を生かすものは日本国の生命の本源に潜める力、日本国の道そのもの、即ち天皇の慈みの御親心と人民の子心との一体なる和そのものでなければならぬ。而して太子の慧眼は深く此を窺（み）そなわして、此を教として顕わしたもうたのである。

曰く、和を以て貴しと為す。

然も太子は此の教を御身に於いて示したもうた。吾等が最も意を秘（ひ）めて想い奉るべきは正しく此の点に存する。而して是れ特に逆悪の臣蘇我氏に対してとらせたまひし太子の御行に於いて最も著しく窺（うかが）われる所である。

○

摂政皇太子としての太子は、天皇の広大無辺なる御親心のままに、蘇我氏をみそなわしたもうた。逆悪の臣なればこそ子として捨てること能わず、必ず必ず救わずにはおかない、という慈愍（じみん）の大御心が其処には流れてみえる。その大御心は、畏くも明治天皇の

しみとした子心を以てひたすら天皇の御親心に帰りまつることができた。蘇我氏の逆悪も此の無碍の大道の自然に開かれゆくを如何ともすることができなかった。

然し此の自然の辿りは唯だ太子御一族の吾等の為に御身を御捨て下されし事によりてのみ成し遂げられた。まことに日本国が救われんが為に太子と太子の御一族は悉く滅びたまわねばならなかつた。身を捨てて国を救う丈夫の道を御子山背大兄王（やましろのおうえのみこ）の御一族が取りたまひし事によりて日本国を永しえに君臣即父子一体の和国の道を確かめ証し得るに至った。而して是れ一に太子の帰依仏の信の実現に外ならぬのである。吾等は此に吾等の久遠の罪業に醒めて、太子の恩徳に泣かねばならぬ。

かく蘇我氏の逆悪に対して取らせたまひし太子の御態度に於いて、吾等は畏くも、天皇の広大無辺なる慈みの御親心とその御親心に帰り奉る臣民の子心との一体としての和そのものが生きて動きますを窺いたてまつる。日本国の永遠の道は此の如くに太子の御身に証されて照り耀いているのである。

○

然るに、太子が此の如くにこの道を信じ行じ永しえに教として伝えたもうたのは、其の本まことに仏法を通してでありたもうた事、是れ特に意を潜めて思うべき所である。

其の根源は蓋し、殊に太子の法華義疏に於いて明らかなる如く、親心に救われゆく子心の和に於て人倫が実現せらるる消息を、仏法が如実に教えくださる所に存する。火宅無常の世界に於ける煩惱熾盛の衆生は、慈父を捨てて遠く食を貧里に乞い迷うらぶれの子である。己が住む処是れただ鬼魅(きみ)腐虫の巢くう朽ちたる家の而も大火に焼かれつつあるを知らずして徒らに眼前の小具に樂著する無知の子である。故に大悲止むを得ず驚いて火宅に入り、或は自ら垢衣をまとい塵を払い漸くこの窮兇を誘い、遂に真実に己れの一切大宝を継がしめるものは慈父の真心なればこそである。言わく

今此の三界は皆是れ吾が有なり

其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

而も今此の処は諸の患難多し

唯我れ一人のみ能く救護を為す

三界の衆生を子としていつくしみたまう仏陀の慈父の情こそ、真によく一切衆生の苦惱を救いたまう根本力である。迷界永遠の暗黒を照らしたもう大光明である。一切衆生唯この御親心に救われまいらせて則ち能く如来常住の涅槃界に遊び得るのである。太子は法華經に於いて、仏陀に帰依するところに發する衆生の万善悉く成仏の因たり、能く以て仏陀の常住無極なる寿命に与かることを讀みたまうた。

過ぎない。然し私としては、此の如くに太子を仰ぎ奉るとき、親鸞聖人が和国の教主と讃め奉りたまいたる御歌の含意を少しく窺いまつり得るおもいがするのである。然れば恭しく視鸞聖人に隨いて讃め奉らん。

皇太子聖徳奉讚

愚禿親鸞作(八十三歳)

日本国、帰命聖徳太子

仏法弘興(ぐこう)の恩ふかし

有情(うじょう)救済の慈悲ひろし

奉讚不退ならしめよ

十七の憲法つくりては

皇法(わうぼう)の規模(きぼ)としたまえり

朝家安穩の御のりなり

国土豊饒(ぶねう)のたからなり

憲章の第二にのたまわく

三宝にあつく恭敬(くげよう)せよ

四生のついでよりどころ

万国たすけの棟梁(とうりょう)なり

而してここに仏法の精髓を認めたまうと共に、同時にここに日本国の道の白日の如く明らかなるを教えたもうたのである。

一切衆生悉く仏子である、是れ一切の国民悉く、天皇の赤子なるを教えあらわす真理である。仏壽極無し、是れまさしく宝祚(ほうそ)の無窮を顯(あらわ)し奉る聖教である。日本国の永遠の道は、久遠の仏と衆生との父子の親しみを通して、如実に顯されている。太子は御身を以て之を信じ味わいたまうと共に、教として之を世間に伝え、以て日本国の精神的基礎を永遠に自覚せしめたもうたのである。太子四十九年の御生涯に成したまひし鴻業の源泉はまさしく此に存すると窺(うかが)われる。

然れば即ち、真諦(しんたい)俗諦(ぞくたい)是れ一なり、資生産業即ち是れ仏法なり。仏法によりて日本国の皇道を顯(あらわ)にし、皇道を実現することによりて仏法の真理を証したまう。此の如く法と国と如実に一なるを示したまうもの、是れ実に聖徳太子の慧眼見真(けいげんけんしん)の御徳の然らしめたまうところ、まことに日本国の教主、和国の教主にまします所以である。之を諸の文獻に徴し、之を御一代の鴻業の跡に顧み、この義まがうべくもないのである。

もとより是れ単に愚人のあわただしき管窺(かんき)に

上宮皇子方便し

和国の有情をあわれみて

如来の悲願を弘宣(くせん)せり

慶喜奉讚せしむべし

昭和十年二月五日

いずれのよいずれのひとか帰せざらむ

三宝によりまつらば

いかでかこのよのひとひとの

まがれることをたださまし

とめるものうたえは

いしをみずにいるるがごとくなり

ともしきものあらそいは

みずをいしに在るににたりけり

南無救世観音大菩薩 哀愍覆護我

南無皇太子勝鬘比丘 願仏常摂受

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

わたしのあんじん

わたしの

あんじん

ナムアミダ

あんじん

いらすの

ナムアミダ

ナムアミダブツ

ナムアミダ

ありがたき

// 生は偶然

死は必然 //

ホンによいとこ

ききました

偶然の生

ありがたき

必然の死

ありがたき

生死を容(い)れて

ナムアミダ

ナムアミダブツ

ありがたき

ひとりのとき

だあれもない

ひとりのとき

おねんぶつさまが

こうささやく

ひとりじゃあ

ないんだよ

ひとりじゃあ—

みほとけの

あさましの

この身なれども

あさましの

この身なれども

みほとけは

みすてたまわで

ナムアミダブツ

ナムアミダブツと

いだきたもう

ああみほとけの

あたたかきみ手よ

ああみほとけの

あたたかきふところよ—

わたしや

光明遍照

十方世界

わたしや

によらいの

ヒザのうえ

おもい出 (一)

われかつて

死なんとしたる

山に来て

鳥の飛ぶ見ぬ

雲の往く見ぬ

死なんとしては

死なざりし

ハタチのころの

純情も

おもい出として

なつかしき

おもい出として

なつかしき

おもい出 (二)

生き死にの

道にまどいて

来し聖山(やま)に

深雪ふるなり

空ふかきより

高野の山に
のほれども

ころ空しく

降(くだ)りたる

わが若き日の

かなしみも

この齡にして

なつかしき

火を

火を

ひとびとの

むねに

ねんぶつの

火を

ナゼ

ねんぶつ

ねんぶつ

ナゼ

言うの――

ナムアミダブツは
無碍の

一道――

一如より

〃一如より

かたちあらわし

み名をしめして〃

ああ

このわれを

このわれを――

わすれても

わすれてもええ

わすれてもええ

おねんぶつさまが、

わすれておくれぬ

となえあらわれ

ナムアミダ

四六年三月五日

南無阿彌陀仏

花田正夫

「ナムアミダブツ」とは梵語をそのまま漢字で音写したものであります。南無とは、帰命、阿彌陀仏とは、無量寿無量光の仏と訳されます。

天親菩薩は、尽十方無碍光如来に一心に帰命したてまつる、と身にうけられました。親鸞聖人は尊号真像銘文に「帰命とは南無なり、帰命と申すは如来の勅命に順(したが)いたてまつるなり。尽十方無碍光如来と申すは、すなわち阿彌陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは尽はつくすという。ことごとくという。十方世界を尽くしてことごとくみちたまえるなり。無碍というはさわるることなしとなり。衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来と申すは阿彌陀仏なり。この如来はすなわち不可思議光仏と申す。この如来は智慧の相なり、十方微塵刹土(みじんせつど)にみちたまえりと知るべしとなり」

「一心というは教主世尊のみことを二心なく疑いなしとなり、すなわちこれまことの信心なり」

とおこころを述べられています。

聖人御自身は、正信偈のはじめに、

「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無し奉る」

と御自身に頂いていられます。いのちきわみましますまぬみほとけによりたてまつり、ひかりほとりなくましますみほとけをたのみたてまつりますと御自身の信心を表白されて、有縁の者に呼びかけて下さっています。

正像末和讃には

超世無上(ちようせむじよう)に撰取し

選取五劫(せんじやくごこう)思惟(しゆい)して

光明・寿命の誓願(せいがん)を

大悲(だいひ)の本(ほん)としたまえり

と讃えられています。即ち一切善悪の衆生をのこらず救い遂げようとの、世にとびこえてまたとなくすぐれた不思議な誓願をおこされた阿彌陀仏が、はかりしることも出来ないほどのながい年月ご思案されてえらびにえらばれた大悲の至極の願が、光明無量、寿命無量の願であるとのこと

であります。十方のあらゆる衆生を大いなる智慧をもってしりつくして下さり、またはしてしない未来をつくして迷いの衆生のあるかぎり、何時々々までも呆れたまわず見捨てたまわぬ大慈大悲の誓願を大悲のもととして下さるのであります。

かくて深くしてほとりのない御智慧におさめられ、遠い昔からはしてしない未来まで長時不断にそがれる御慈悲にとかされて、石・瓦・礫（つぶて）の如き身も黄金（こがね）と転成して下さるのであります。

帰命無量寿如来

さてはかり知られぬおいのちをもつて、常に慈悲をそそいで下さるのは何故でありましょうか？

それは、私自身が性こりもなく、何時までたっても迷い惑うてやまず、したがって、はてしなく生死の苦海に沈みきって浮ぶ瀬のないことを、わがこととして悲憫されるがためであります。たとえますと、病苦にしましても、私の三十五歳の時肺疾で数年静養し、四十六歳の時突然の狭心症発作で入院、心筋障害で長期療養生活、さらに数年前に腫瘍、等々たびたび病んでおりますが、良寛さんのように「病む時は病むがよろしく候：」という心境にはすこしもなれず、そのたびごとに病苦を新しくうけ続けております。ほかの事柄も同様で、またしても失敗、またしてもや

のやまぬ身も、愚痴とはなれたまわぬ大慈のみころにかされ、のがれぬ死の山路の淋しさも、それをそれとかねてしるしめてことにあわれみたまうみ仏ましまして、悲しければ悲しいまんま、苦しければ苦ししいまんま、たのみ力になって下さるみほとけの大慈懐にいだかれて、浄土に生れ、無碍の光明と一味に転じさせて頂くのであります。そこに生も死も貫ぬいて、夫々の時に、その時でなければ味えぬ妙境を恵んで下さるうがための誓願であります。

この無量寿仏の大慈悲ましましてはじめて、老少善悪男女貴賤のへだてのやまぬ身も、青年は老年をさげすまず、老年は青年を見下げず、壮年はひとりよがりのところが砕かれて、死の暗い旅も光明かぎりない新生と転じさせて頂けるのであります。

南無不可思議光如来

次にわれらの業報のすみずみまでを照らしあらゆる衆生をことごとくしるしめて下さる御智慧のひかりを放って下さるのは何故でありましょうか？

それは私自身が地上を業縁のままにめぐり歩きながら、いたるところで、することなすことおもうことのすべて空しく、失敗と苦惱をことごとくに繰り返かえしてやまぬ身を、みほとけがよくしるしめされて、大いなる光明のふところにおさめて下さるうがためであります。たとえば人権尊重、

りそこないで、われとわが身に呆れはてるばかりであります。このどうにもならない死骸同様の愚鈍の身に、何時々々までも注ぎに注いで下さる大慈大悲があらわれて下さるのであります。このいついつまでもお見捨てのないお慈悲一つに支えられて、身から出た錆ながら、業苦はてしない人の世の旅をたどらせて頂きます時、仏願力の自然として、不思議にも罪障が転化される妙味を恵まれます。私自身これを、人生の四季が、その時、その時に荘嚴せられる不思議と申しております。

人生の四季について、道元禪師が、

春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえてすずしかりけり

と詠じていられるのを思いあわせませす。春とは青年期、夏とは壮年期、秋とは老年期、雪さえる冬とは死後のいのちと私流に味わっております。私共煩惱のかたまりとも云うべき身には、冬は寒いと歎き、夏は暑いと愚痴をいい、秋はうら淋しいと憂愁する等々と、見るもの聞くもの触れるものすべてが苦の種となりますが、そうした愚痴のやまぬ身に御一緒下さる大慈悲のみほとけがましまして、青年期には愛欲の広海に沈む身も大悲の御涙によみがえり、壮年期には名利の大山に迷いこむ身を撰取不捨のの御手におさめとられ、老年期には身は弱つても我慢は強くなり愚痴

人格重視の声はしきりにきき、そのことは当然すぎる程当然な人の道であります。私自身は飽くことを知らぬ利己の一念にさえられて、自分とかかわりのある一切の人々を火鉢同様にあつかい、冬はありがたがり夏は邪魔ものにするという物品あつかいしか出来ず、したがって人と人との心の真の交流は断絶し、利害一つで離合集参するという味気ない人生の沙漠をくりひろげております。大無量寿経の終りに、釈尊がことに私共の有様を詳細に示されて、いまます。貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱に酔いしれて、目前の欲望の奴隷となって忽々として空しくすこし、悪縁にふれては殺し合い、だましあい、威張り散らし、愛欲に目がくらんでは他を敵視し、或は銭財を湯水のように浪費し、賭事にふけて家をほろぼす等々であります。これもあらゆる煩惱をすべて身にもつ私自身の、火宅無常にして五濁悪世の縁にふれていたるところでつくりだす業（ごう）さらしの姿であります。この煩惱悪業の兎の毛・羊の毛のさきにいる塵ばかりをもみほとけは照覽して下さって、すみずみまでも大悲の御手をさしのべて下さるのであります。有名な願山陽を大喝して迷妄をひらかれた易行院法海師の歌に

○明らけひがりを四方（よも）のかぎりにて月のうちなる武蔵野の原

○武蔵野のチリチリ草の露だにも身をほそめてぞ月は入

りぬる

と、みほとけの無量の光明に自分の全体がすっかりおさまられており、また身にもつ些細な業報をも知り尽くされて御一緒下さる徳光を讃仰していられます。

このどこどこまでも御理解下さるお智慧の名号を灯火として、煩惱におおわれた真暗な大夜を歩ませて頂きます時、強烈なひかりに一切のものが美化されるように、それぞれのところをそれぞれの尊さがあられるのであります。丁度それは、秋の野山を七草が飾るように、愚者は愚者なりに、智者は智者なりに、愚者の卑屈の泥を洗い、智者の橋樑の毒をとかして、地上を莊嚴して下さるのであります。それはまた太陽が照り輝く時、ロソクも油灯も電灯も一切その光力を奪われて、同じ明るさを与えられるような趣きがあります、その陽光の前には、電灯のほこりも、ロソクの弱さも用のないものとなり、五十歩百歩の差を問題にしたことの愚さを恥じ入るばかりであります。

この無量の光明がとどこぬまでは、自分の居る場所が一番不幸で自分の周囲にしあわせがありそうな幻影が消えず、心はいつも四辺に散って不平と不満の連続となるのであります。それというのもこの光明がなければ自身の煩惱熾盛、罪業深重にして地獄をさだめとするほかはない身とすることも信じられず、したがって切々として倦むことの

身に、点滴が岩をもうがつようにな、倦むこともなく、絶えることもない、みほとけのはたらきかけのお蔭で、帰命せずにはいられなくなるのであります。聖徳太子の三経義疏に「如来に調伏（ちようぶく）せられて如来に帰依す」とあります。このように如来のお力を加えて下さることなしには、浮ぶ瀬は絶えてないのであります。

この一点は、自分の智慧才覚でつくりあげ、思いかためた信心とは全く別物であります。私共がどんなにしっかりと、いのちがけで信じると云ってみても、自分自身の手のしびれる時、みな崩れてしまいます。

私はある時、一人の狂信の人にあいました。そのためにその人の周囲の人々は種々な迷惑を蒙っていて、困りはてた挙句、私にあうてくれるように頼まれました。そこで当人に会って「君の近頃の心境は？」とたずねると「私の信仰はどんな目にあっても、殺されても微動もさせぬ」と肩をいからせての返事でした。そこでおもわず「君の信心はそんな程度ですか？」と云いますと「これ以上の信心がありませんか」と問いかえしますので「生みの母にむかって、本当の母と申していますそれに違いありませんという子があるでしょうか。本当の親と思うとか、本当の子と思うというのは義理の親子の間のことです。真実の信心の世界にはその思いさえ無用なまでのやすらぎとやわらぎがあ

ない大悲の心も、ひとごととしか思えないからであります。讃阿弥陀仏偈和讃に無辺光仏を讃えられて

解脱（げたつ）の光輪きわもなし

光触（こうそく）かむるものはみな

有無（うむ）をはなるとのべたまう

平等覚に帰命せよ

とあります。一切の煩惱から解放されたみほとけが、我等の無尽の煩惱をくだいてさとりの世界に導き入れて下さるために御身から放って下さるみひかりにふれる時、あらゆる邪見からはなれさして頂けることを述べられて、そのみほとけに帰しまつれとおすすめであります。

南無とは帰命

蓮如上人はくりかえして、弥陀をたのめと勧められていますが、私共は眼前の物や人をたのんでみ仏をたのむころは微塵もおこらぬのであります。元来私共の限りある智慧、限りある能力をもってしては、無量寿、無量光のみほとけを知ること、近づくことも出来ないであります。清沢満之師は「自分にはどうしても知る力がないとなって弥陀を信じるようになった」と告白していられます。古歌に

たのませたのまれたまう弥陀なれば、たのむころもわれとおこらず

とありますように、信ずることも、近づくことも出来ない

ります。君がそのぎこちない力み心から解放された時、真実のたしかさ、たしかと思うことさえいらぬ信が樹立されましょう」と語り合ったことがあります。

聖人が自力をもととした信心をいましめられて、仏力願然による絶対他力の大信心をおすすめ下さるのも、自力信心のたよりなきを知り尽くされての上からであります。真実は真実なるものの力で真実を信知せしめて下さるのであります。帖外和讃にも、

金剛堅固の信心は

仏の相続よりおこる

他力の方便なくしては

いかでか決定心をえん

噴、寿命無量、光明無量の弥陀仏の不可思議の徳光なるかな！無量寿仏の慈光は、時間の長短をこえて、いかなる時にもつねに現在（いま）をてらして下さり、無量光仏の智慧光は場所の遠近をこえて、いかなるところにもいつも此処（ここ）にあらわれて下さる、何時でも何処でも私と御一緒下さって、同喜同憂して下さるみほとけましまして、浄土への旅を導かれてまいるのであります。何とありがたいことでありましょうか、唯御名をたたえまつるばかりであります。



あ
と
が
き

歳末となり人間忽々の感しきりであり、十二月は近角先生の御忌月として、ことに御縁の深い聴聞子と白井先生の御原稿を頂きました。

又十二月八日は積尊成道の聖日で、禪家の人々は必死の接心によってこの日を迎えられると聞いております。積尊の出家までは、城中での煩惱肯定の生活、次いで六年の苦行は煩惱否定の理想主義の生活でありましたが、そのいずれにも光なきことを悟られて、身心をととのえられて菩提樹下の端坐、そこに如実智見の正見の智で一切の煩惱を正しく理解せられるようになられました。ここに荒れ狂う煩惱魔はそれぞれに調伏せられて仏坐を莊嚴し、人の世にはじめて久遠の光が射しそめたのであります。成道の積尊の御眼には、煩惱肯定してかえって煩惱の奴隷になる者も、煩惱を否定し、敵として悪戦苦闘する者も、その空しさを知り尽くされて、共に憐れむべき者といかにいたましくうつることでありましょ

うか、

衆生かわいや生死の海に おのが罪から浮き沈み

と或時池山先生は仏意を仰がれました。しかもその大悲心は、高い山から都会の生活を見おろして、おい人類よと呼びかけるような浅薄なものではなく、

久遠このかた子故の廻向 わたし一人をかけた思ひ

と先生自身の上に体感せられました。それは同時に私共一人一人の上にそそがれる仏心であります。

俳人一茶は、

ともかくもあなたまかせの年の暮と晩年に詠じました。ともかくも、と

は、自力、他力のあくもくた、所謂はからい心をすてて、地獄一定の身の上に注がれる仏の本願一つをたのみとした心であります。この句を軽く聞きますと、あなたまかせのこなたは留守、とあやまり勝であります。決してそうしたものではなく、たすかるよすがのない身をたすかるよすがのない身とうけとって、そこに無明の闇を破つて道を開いて下さる本願のものしきへの渴仰であります。これは大変なことであり、私共は病氣すれば治癒することばかりを願ひ、不治ときくと長持ちすることにかりはてて、死から逃げまわつたあげくに遂には死の深淵に力なくして沈むのであります。この様に死を受取ることが出来ぬように、煩惱罪障の身の地獄一定と受けとることも出来ないのであります。たつた一つ、この身に同じてお見捨てのない大願

のたのもしさあって、それを我身に受けとめて越える力を恵まれるのであります。事多い年の暮、この一句を新らしく味わうことでありませす。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午後一時半。

南区駈上町二の八八、一道会館、一道会例会。

市電、新郊通り二丁目下車、東入ル三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前午後。

昭和区小桜町、教西寺法話会。

市電、御器所通り下車。市バス北山下車。

定価 半年 四〇〇円(送共)
一年 八〇〇円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七

慈光第二十三卷 第十一号 昭和四十六年十二月十五日発行(毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可